opusdei.org

## 12. 償いの習慣に対するイエス・キリスト の姿勢

イエスは償いに充実したその 生涯において、「神の御国」 と償いは切り離すことができ ないことを示してくれた。

## 2016/09/28

他の宗教と同様、償いに関する習慣はイスラエルの民に深く根付いていた。彼らは生活を改め、神への回心を望む証として、祈り、献金、断食、頭に灰をかけること、粗い生地

の被服などの多くの習慣を執り行っていた。

歴史学者や聖書の研究家が一致して 唱える通り、イエス・キリストの教 えは「神の御国」を中心とするもの である。また、イエス・キリストは その「神の御国」の実現に不可欠な ものとして回心が必要と教えておら れる。「時は満ちた、神の国は近づ いた。悔い改めて福音を信ぜよし (マルコ1.1節)。イエスが言う償 い、すなわち回心とは深い心の回心 を意味する。しかし同時に、その心 の回心に応じて生活をも回心し、償 いと言えるような実りをもたらすも のでなければならない。つまり償い は、行いや振る舞いに表れて初めて 意味のある真の償いと言えよう。実 際、イエスは償いに充実したその生 涯において、「神の御国」と償いは 切り離すことができないことを示し てくれた。イエスは断食し(マタイ 4.2)、快適な場所での休憩を捧

げ(マタイ 8, 20)、祈りに夜を 徹し(ルカ 6, 12)、そして何よ り十字架で自らの命を捧げた。

イエスの初代の弟子達はその教えを 受け、イエスについていくというこ とは彼の通り生きるということと 悟った。この点において聖ルカは、 キリスト者はキリストが生きた通 り、日々の十字架を背負って生活す る必要があると最も強調している福 音記者である。すなわち、イエスが 弟子達に示した通りである。「だれ でも私についてきたいと思うなら、 自分を捨て、日々自分の十字架を負 うて、私に従ってきなさい」(ルカ 9.23)。この様に、初代キリス ト者は後も神殿で祈りを捧げ(使徒 行伝3,1)、断食などの償いを続 けた(使徒行伝13,2-3)。ま た、断食の際はイエスの教えに従っ た「また断食をする時には、偽善者 がするように陰気な顔つきをする な。彼らは断食をしていることを人

に見せようとして、自分の顔を見苦して、自分の言ってもる。ようにある。な受けるはその報いを受けるはないのである。の頭にがいるのである。の頭に当れながしているのでは、かられないである。では、からになる。などにないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。ないである。。

更に、キリストは十字架での死により人類を罪から救われた。このキリストの十字架の死の値打ちかららい、では、では、では、では、では、ないでの、では、ともにきる方法と認識である。これは、聖パウロのためにして、といるとなるないとなった。これは、ないないとの苦しみのなお足りないところ

を、私の肉体をもって補っている」 (コロサイ人への手紙1,24)に 記されている通りであり、現代の教 会において行われている通りであ る。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/iesu-shitsumon-12/ (2025/12/14)